

私の就職活動について

東京大学大学院工学系研究科電気系工学専攻

唐 睿

2019年4月から私は博士課程の最後の一年を迎えました。博士論文の審査に向けて準備を始めるとともに、卒業後のことも考えなければならなくなりました。それまではまじめに勉強と研究をすれば良かったので今後のことについて考えたことが少なく、明確な目標を持っていなかったため迷っていました。博士を取得した学生にとっては、卒業後大学でポスドクをやって、数年後助教か講師になって、一生懸命研究成果を上げて教授への昇進に向けて頑張るのは有り得そうな道です。このように二十年間頑張れば、私もいつか教授になれるかもしれません。しかし、現実問題として、今の中国も日本も、大学教員採用の競争は非常に激しくなっています。特に、中国の大学で理工学系の教員職に応募する場合、Nature、Science系の論文を持っていないと、いい大学で助教以上の職に採用されるのは非常に難しいです。研究は非常に面白いことですが、科研費が足りないこととテニユア（終身雇用）取得まで定期的に論文を出さないと首になることを常に心配しながら研究するのは好きではないため、企業に就職することを決めました。

しかし、どの国で就職するか、どのような企業に応募するかについて、新たな悩みが出てきました。国に関しては特にこだわることがありませんが、私にとってはどの国の企業に応募してもそれぞれの問題があります。まず、日本企業の中で、私の研究テーマ光集積回路に関連する業務がある企業は非常に少ないです。そして、多くの日本企業はエントリーの締め切りを3月中にしていますが、2019年3月末にアメリカでの留学を終えて日本に帰ってきた私は、すでに日本での就職活動の一番良いタイミングを逃していました。残る選択肢は、博士課程の学生を通年採用しているわずか一部の企業です。次に、アメリカでは研究テーマと関連性の高い企業が多いですが、私はアメリカの大学の学位を持っていないため、卒業後すぐにはアメリカで勤務できません。就労ビザを取れない可能性も高いし、取れたとしても勤務が始まるまで時間がかかるため、企業から面接のチャンスももらえない可能性が高いです。最後に、中国に帰って就職するとの選択肢もありますが、正直近年の中国の通信とIT企業にはあまり就職したくないです。な

ぜなら、中国の通信とIT業界にはブラック企業が非常に多く、すでに社会問題になっているからです。特に、2019年に中国のIT企業の社員から「996,ICU」という有名な言葉が作られました。これは、朝9時から夜9時まで週6日の労働を続けていくと、いつか病院のICU（集中治療室）に運ばれるという意味です。現在ほとんどの中国IT企業では、こういった996労働が暗黙のルールになっています。これは明らかに中国の労働法に違反するものですが、政府が積極的に企業の違法行為を取り締まる気配はあまり見られません。その理由は、中国の経済成長はITと通信企業に大きく依存し、残業を制限すると中国の経済成長が大きく影響するからだと思っています。

様々な問題があると言っても、行動しなければならないので、とりあえずアメリカ、中国と日本の企業にたくさん応募しました。最初に応募したのは偶々見つけたAIチップを開発している日本のベンチャー企業です。その企業のやっていることが面白く、持っている技術も凄そうなので、ホームページに新卒の募集が出されていないにも関わらず、むりやりに応募して、数回の面接を受けてから内定をもらいました。また、中国の企業は五社応募し、三社から内定をもらいました。そして、一番驚いたのは、博士の研究と関連性の高いアメリカの企業に十社以上応募しましたが、ほとんど電話面接の機会も与えてくれなかったことです。唯一面接のチャンスと内定をくれたのは、アメリカでの留学先の先生がコンサルタントとして勤めているベンチャー企業です。アメリカの学位を持っていない人にとって、就職活動をする際にコネクションがどれほど大事かを実感しました。

もらった内定の中には、大手企業とベンチャー企業が両方ありました。大手企業に入れば安定した生活が過ごせるかもしれませんが、私は安定した生活よりも仕事のやりがいと面白さをもっと重視しています。仕事のやりがい、面白さと給料などを総合的に考えた結果、やはり量子コンピュータを開発しているアメリカのベンチャー企業が一番魅力的だと思い、その企業の内定を承諾しました。

以上で、私の就職活動は終わりましたが、就職活動で今後の人生についていろいろ考えさせられました。人生の新しい段階に入るともちろん不安はありますが、今後は新しい目標を立て、頑張っていきたいと思います。